

Title	早生まれは損をするのか? : 相対月齢効果が学力や非認知能力に与える影響
Sub Title	Why is birth-of-month effect so persistent? : roles of parents, teachers, and peers
Author	中室, 牧子(Nakamuro, Makiko)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2019
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2018.)
JaLC DOI	
Abstract	入学時の年齢が、学力テスト、スポーツ、リーダーシップなど、学生の生活のさまざまな分野に影響を及ぼしていることは広く知られている。近年は、同じ学年の中で相対的に年長の生徒の成績がよいことも指摘されるようになってきている (「相対的年齢効果」と呼ぶ)。 最近の論文によると、入学時の相対年齢が学力に与える効果は長期的に持続することが指摘されている。しかし、なぜ長期間にわたって相対年齢効果が持続するのかのメカニズムはほとんどわかっていない。 本研究の目的は、入学時の相対年齢が学力に与える影響が持続する理由を明らかにすることである。埼玉県内の公立学校に通う4年生から9年生までのすべての生徒の追跡調査を利用した実証分析の結果によると、小学校4年生の最年長と最年少の学力の差は0.36標準偏差にものぼり、この差は生徒の年齢が上がるにつれて縮小するが、中学校3年生になってもその差は消えず、小4の3分の1程度、0.13標準偏差は残る。 この持続性についての1つの説明は、最年少の子供の成績が低いことが自信とモチベーションを低下させ、それが後の学年での成績の低下につながるというものである。実際、最年長と最年少の非認知スキルのギャップをみると、認知スキルとは対照的に、非認知スキルのギャップは時間が経っても縮小しないことがわかった。調査期間を通じて、最年少の生徒の自制心、自己効力感、および勤勉性は、最年長の生徒よりも0.05-0.10標準偏差低い。 この理由を明らかにするため、教員や同級生との関係をみてみると、最年少の生徒は、教員や同級生との交流の質が低いことがわかる。ただし、最年少の生徒は学校外での勉強時間が長く、通塾率が高いこともわかっている。こうした家庭での追加的な教育投資は、最年少の生徒が最年長の生徒に追いつくのを助ける可能性がある。 Why is relative age effect so persistent? To answer this question, we first document that relative age effect on cognitive skills diminishes gradually over grade, but that on non-cognitive skills including self-control, self-efficacy, and conscientiousness remain constant. To shed light on the underlying mechanisms behind the persistent relative age effect, we examine the roles of parents, teachers, and peer students. We show that younger students and their parents exert an effort to catch up with their older peers by studying more hours outside school and going to a private tutoring school. However, younger students have poorer quality of interactions with their teachers and peers, which might result in younger students' lower non-cognitive skills.
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2018000005-20180202

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究代表者	所属	総合政策学部	職名	准教授	補助額	500（特B）千円
	氏名	中室 牧子	氏名（英語）	Makiko Nakamuro		
研究課題（日本語）						
早生まれは損をするのか？：相対月齢効果が学力や非認知能力に与える影響						
研究課題（英訳）						
Why Is Birth-of-Month Effect So Persistent? Roles of Parents, Teachers, and Peers						
1. 研究成果実績の概要						
入学時の年齢が、学力テスト、スポーツ、リーダーシップなど、学生の生活のさまざまな分野に影響を及ぼしていることは広く知られている。近年は、同じ学年の中で相対的に年長の生徒の成績がよいことも指摘されるようになってきている（「相対的年齢効果」と呼ぶ）。 最近の論文によると、入学時の相対年齢が学力に与える効果は長期的に持続することが指摘されている。しかし、なぜ長期間にわたって相対年齢効果が持続するのかのメカニズムはほとんどわかっていない。 本研究の目的は、入学時の相対年齢が学力に与える影響が持続する理由を明らかにすることである。埼玉県内の公立学校に通う4年生から9年生までのすべての生徒の追跡調査を利用した実証分析の結果によると、小学校4年生の最年長と最年少の学力の差は0.36標準偏差にのぼり、この差は生徒の年齢が上がるにつれて縮小するが、中学校3年生になってもその差は消えず、小4の3分の1程度、0.13標準偏差は残る。 この持続性についての1つの説明は、最年少の子供の成績が低いことが自信とモチベーションを低下させ、それが後の学年での成績の低下につながるというものである。実際、最年長と最年少の非認知的スキルのギャップをみると、認知スキルとは対照的に、非認知スキルのギャップは時間が経っても縮小しないことがわかった。調査期間を通じて、最年少の生徒の自制心、自己効力感、および勤勉性は、最年長の生徒よりも0.05-0.10標準偏差低い。 この理由を明らかにするため、教員や同級生との関係をみてみると、最年少の生徒は、教員や同級生との交流の質が低いことがわかる。ただし、最年少の生徒は学校外で野勉強時間が長く、通塾率が高いこともわかっている。こうした家庭での追加的な教育投資は、最年少の生徒が最年長の生徒に追いつくのを助ける可能性がある。						
2. 研究成果実績の概要（英訳）						
Why is relative age effect so persistent? To answer this question, we first document that relative age effect on cognitive skills diminishes gradually over grade, but that on non-cognitive skills including self-control, self-efficacy, and conscientiousness remain constant. To shed light on the underlying mechanisms behind the persistent relative age effect, we examine the roles of parents, teachers, and peer students. We show that younger students and their parents exert an effort to catch up with their older peers by studying more hours outside school and going to a private tutoring school. However, younger students have poorer quality of interactions with their teachers and peers, which might result in younger students' lower non-cognitive skills.						
3. 本研究課題に関する発表						
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)			